MACHINE DESIGN & TRIBOLOGY
機素潤滑設計部門ニュースレター
MD&T
No.19 June 1999
JSME Machine Design and Tribology Division
ISSN-1340-6701

梅さんを偲ぶ

香川大学　木村　好次

部門化をさぼった木村委員長の後を受け，この部門を立ち上げてくれた梅澤清彦氏が亡くなった。停年を前にしての早世で，ご遺族の悲しみはいかばかりかと思う。まだまだこれから，という歳で梅さんを喪ったことは，機素潤滑設計部門，というより機械工学にとっても，埋めきれない損失である。なんで死んじゃったんだろうか。

骨太の工学

動力伝達装置の小型軽量化・高速化における最大の問題として，梅さんは歯車の低騒音・低振動化を，35年にわたって追い続けた。実際に使われる歯車，製作誤差，シミュレーション技術，そして計算機の能力など，年々変わって行く外部・内部環境に対応して役に立つ研究を展開したところに，梅さんの真骨頂があったのだろう。

ある研究会で，梅さんの"遺稿"を北條春夫先生が代理で話して下さった。まさに一代の研究の集大成だったが，その予稿の最後のところに，わざわざ下線を引いて梅さんはこう書いている。"現実に歯車系の振動挙動シミュレーションを開発して，最も苦労するのは各部のばねこわさと減衰係数をすべて実測するところから始めなければならないこと，まして各部と各部の接触面のそれらの値は推定で決めるしかないことである。"

梅さんの息づかいが伝わって来るではないか。

いつも本気で

梅さんの担当してるのは機械工学の主流の一つであり，ぼくの専攻はちょっとはずれかかったトライボロジー，というような感じで，一種の尊敬を込めてぼくは梅さんを見ていた。それと，梅さんのいつも本気で議論するところと，ずばりとした物言いが好きだったから，大事な仕事を引き受けると，よく梅さんに助太刀をたのんだ。

２年少し前，機械学会の第二世紀将来構想実施計画委員会を引き受けたときも委員に入ってもらった。果たして梅さんは常に議論をリードしてくれたが，その発言がしばしば穏当さを欠いたことも事実である。

学会の社会との連携を強めるために，専門家以外の人を会員に入れよう，という問題があった。梅さんは専門家集団であるべきだという意見で，乗り気ではない。

"いやさあ，'おばさん'を会員にするのは反対だなあ。"

梅さん，それはセクハラだよ。

ひでーなぁー

機械学会の創立百周年記念出版で，"機械要素・潤滑・設計：その展開と今後の飛躍"を担当したときにも梅さんが手伝ってくれ，六本木の生研まで来てくれた。

とにかく梅さんと一緒だと話が早い。あっという間に内容が決まり，執筆者も確定した。ぼくがその場でワープロのキーをたたき，原稿依頼の書類をつくった。

梅さんには"梅澤"の"澤"にこだわりがあった。

"この字は，四方に幸いを潤す，そういう意味。沢になると全然違うでしょう。"

それは前から知ってたから，自分用の辞書に入れてあった。"うすらはげ"と打てば"梅澤清彦"と出る。そのころは，まだ毛髪が頭頂部をかなり覆っていたのである。

"梅さん，ちょっと見てみろ。"

と，実演して見せたのが悪かった。例によって口をとんがらせ，梅さんはわめいた。

"ひでーなぁー，木村さんひでーなぁー。よーし，おれもやってやろ！"

たぶん，梅さんはやらなかったと思う。

部門同好会で"演説"する梅澤教授
（青山学院での通常総会の後、渋谷にて
1997年3月30日）